

人間は人間を幸福にできる！きっと一一袂を脱いで

9月26日 松本深志高等学校

谷川彰英

深志高校の皆さん、こんにちは。深志第16期3年1組卒業の谷川彰英（たにかわ あきひで）と申します。私たち16期生は1964年に卒業しました。第1回目の東京オリンピックの年です。

深志の長い歴史の中でひと際悲しい記憶に残るのは1967年の西穂高岳の落雷事故ですが、その悲報を大学4年次に遊学先のドイツで知りました。皆さんからすれば遠い昔、昔の時代の話ですね。

今回の講演をプロモートしていただいたのは、私たちの大先輩で東京都立大学の第10代総長を務められた荻上紘一先生です。先生とは私が筑波大学の副学長時代に大学評価関連の仕事でお世話になったことが機縁でお付き合いさせていただいています。先生は私が入山辺の徳運寺に生まれ育ったことを知ってからは私のことを「大僧正猊下（げいか）」と呼ぶようになりましたので、私は「上様」と返すことにしています。

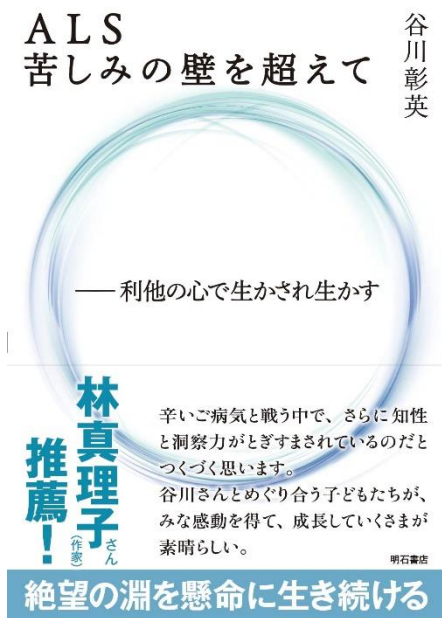
私がALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病と格闘するようになってからも、常に励ましをいただいています。時折「蜻蛉男子に栄えあれ」と校歌の一部を挟んだメールをいただいたりすると、不思議に青春時代の熱い思いがよみがえってきます。母校というのはありがたいものです。

この講演を間接的に後押ししてくれた人がもう一人います。同じ16期3年1組の同級だった太田和彦君です。皆さんもご存じかもしれませんが、太田君は居酒屋評論家としてBSで居酒屋放浪の番組を持つほどの有名人です。彼は私より一足先に居酒屋の本を次々と出版していきました。それにつられるように私も地名本を出してきました。確かに3年1組から二人の物書きが出たということは特筆すべきことかもしれません。

太田君は数年前から、母校に本を寄贈したら、と何度か声をかけてくれるようになりました。しかし、私はALSを宣告されたばかりでそれどころじゃないというのが実態でした。今回このような機会をいただきましたので、母校に寄贈させていただきます。

本日の講演に間に合うように『ALS 苦しみの壁を超えて一利他の心で生かされ生かす』（明石書店）を書き上げました。この本がALS宣告後に出した本としては9冊目になりま

す。



(1)私の「生きる！」宣言

ALS と (筋萎縮性側索硬化症) という病気をご存じですか。全身の筋肉が動かなくなり、最後には眼球しか動かなくなるという残酷な難病です。原因は不明で、現代医学では治療法はないと言われています。

私は6年前の2018年2月に発症し、翌2019月にALSの宣告を受けました。それ以降手足は全く動かず、人工呼吸器を付けているために発声もできません。外出できたのはこの5年間でたったの4回ですし、日ごと周囲の人たちとコミュニケーションを図るのも難儀です。正直苦しいです。辛いです。時には悔し涙を流すこともあります。ALSに罹り患かんする確率は10万人に1人か2人だと言われ、国内の患者数は9,000人程度だそうです。

こともあろうに、何でこの自分がこんな目に遇わなければいけないのか。何度そう思ったかしれません。生まれてこの方自由奔放に生きてきましたが、天罰を受けるほどの悪さをしたとは思えません。それどころか、意識の上では「世のため人のため」に力を尽くしてきたつもりです。

客観的に見れば、ALSの罹患はとてつもない不幸と言わざるを得ません。しかし、これまで私はこの難病に負けることなく生き抜いてきました。私一人では何もできない身ですが、妻をはじめ家族、訪問医師、訪問看護師、それに十数人に及ぶヘルパー他多数の皆さんのサポートに支えられているお陰です。まず私の命をつないでいただいている皆さんに感謝しなければなりません。

これまで命をつないでこられたことの要因はいくつか挙げることはできますが、最大の要

因は、手足は動かさず発声もできないにもかかわらず、本の執筆を続けることができたからです。

(1) 恐怖と闘った日々

その日まで私は風邪一つ引くこともなく元気に仕事をしていました。ところが悪魔のような運命が突如襲いました。6年前の2018年2月19日の夕方のことでした。突然食事が喉を通らなくなり、1週間で体重が10キロも落ちてしまいました。当時はテレビ出演などもあってダイエットを試みていたのですが、1キロ2キロ落とすのも大変な思いをしていました。それなのに1週間で10キロ！これは恐怖でした。自分の体の中で確実に異変が起きている！最初は膵臓がんを疑ったのですが、簡単な検査でその疑いは晴れました。

体重を落とさないように毎日水をはがぶ飲みしていたのですが、それが原因だったのでしょうか。ある晩頻尿が止まらず、翌朝病院の泌尿器科に行って診てもらったら前立腺がんの疑いがあると言われ、県のがんセンターで検査を受けたところ、前立腺がんの宣告を受けました。この時期が今考えると最も苦しい日々でした。がんの強い薬を誤って飲んでしまい意識を失ってスーパーの駐車場で倒れ、救急車で病院に搬送されたこともあります。

(2) 歩けなくなる恐怖

あらゆる病院を回りましたが、どこも原因解明には至りませんでした。当時はまだ放送大学講師、読売教育賞審査委員会座長、中央教育研究所理事長、東京教育研究所所長の他に、つくば市にある筑波技術大学の経営協議会委員などの役職を務めていました。技術大の学長さんは神経内科の医師でもあったので、相談に乗ってもらったのですが、先ず言われたのは「老人で一番怖いのは、歩けなくなることしゃべれなくなることです」ということでした。

症状はまさに学長先生の言われたように進行しました。500メートル歩けたものが200メートル、100メートルと縮まり、ついに50メートルも歩けなくなりました。一体なぜなんだ！ どういうことなんだ？——原因がわからないまま苦悶の日々が流れました。

(3) しゃべれなくなる恐怖

その間放送大学の授業の他、いくつかの大きな講演もこなしましたので、しゃべれなくなるという恐怖の進行は歩けなくなる症状の進行より遅かったことは事実です。ところが、翌19年1月の末、決定的な事態を招いてしまいました。埼玉県川口市に講演に行った時のことです。その日も川口駅のホームをまともに歩ける状態ではありませんでした、事態はその直後起こりました。

会場まで車で運んでもらって、いざこれから講演となったその時のことでした。自分ではしゃべっているつもりでしたが、「声が出ていない、聞こえない」という声が会場から挙がったのです。自分では何が起こったのか皆目わかりませんでした、万事休す……。用意し

てくれたタクシーに乗り込むのが精一杯でした。

それ以降は外出を控えていたのですが、いくら寝ても寝ても寝足りず妙な夢を見るようになり、起きていても仮面ライダーの敵のショッカーが幻覚となって襲ってきました。でもその当時はそれが死の前兆だとは気づきませんでした。

(4) ALSの宣告

そしてついに運命の日を迎えました。19年3月22日の深夜のことでした。私が呼吸していないことに妻が気づき、救急車を呼び千葉大附属病院のICUに搬送されました。あと15分遅れたら助からなかっただろうと後で言われました。私はあの時確かに死んだのだと思います。少なくとも、死ぬとはこういうことなのだろうなと思ったことは事実です。

ALS（筋萎縮性側索硬化症）だと宣告されたのは5月30日のことでした。担当医師数名が病室に来られ、病名とこれは現代医学では治療不能と告げられた時は、妻も私も1年以上苦しんできた病名が判明したことでホッと、むしろ笑顔で聴いていました。それほど、それまでの不安と恐怖が強かったということです。

しかし、悲しみと絶望感はすぐ襲ってきました。自分に残された命はあと半年？ 1年？ 当然のことですが、それまでの72年間の人生を振り返りました。力及ばないこともあったけれど、与えられた状況の中では精一杯生きてきた—そういう自負はありました。妻宛てに文字盤にこう書きました。（当時はまだペンを握れたのです）

「これまでずいぶんケンカもしてきたけれど、ここまでやってこられたのはお前の協力があったからだ。ありがとう。我が人生に悔いなし！」

妻の手を握ったその上に涙がこぼれました。悔しさと絶望と感謝の気持ちが入り混じった涙でした。それをドアの陰で見ていた次男の嫁が、「お母さん、悲しい時は泣きましょう」という名言をその夜LINEで送ってくれました。これ以上の慰みの言葉はありません。

(5) 「生きる！」の選択

ALS宣告後、私はしばらく生死の間をさまよっていました。例えて言えば、北アルプスの急峻な尾根に立たされ一歩足を踏み外せば死の奈落に転落する—そんな思いでした。

生きるということはどう死ぬかということ、死ぬということはどう生きるかということ。私たちの年齢になると両者は表裏一体ですね。生きるか死ぬかの選択を迫られましたが、私は「生きる！」を選択しました。理由は単純です。死ねなかったからです。

死ぬにはどんな方途があるか考えました。まず考えられるのは自殺・自死ですが、これは無理だとすぐ判断しました。家族に迷惑がかかるからとも考えましたが、それ以前に手足が動かない状態では物理的に不可能でした。次に考えたのは誰かに頼んで命を絶つ方法です。その年の暮れ近く、京都でALS患者の女性がSNSで知り合った医師に命を絶ってくれと頼み、実行するという事件が起こりました。「囑託殺人」という言葉がこの世に存在するこ

とを初めて知りました。しかし、法を犯してまでして命を絶つというのは到底受け入れられるものではありませんでした。残されたのは事故死ですが、これは運を天に任せるしかありません。

死ぬことができないと悟った私は「生きるしかない」と腹を括りました。まず考えたのは、前に向かって歩くこと、そして、何かをし続けることでした。では今の自分にできることは何か？ そう考えてすぐ浮かんだのは本を書くことでした。

「そうだ！ 本を書くことならできる」との思いで入院中から書いたのが、『ALSを生きる いつでも夢を追いかけていた』（東京書籍、2020年）でした。当初はあと2冊は本を出したいと言っていたのですが、いつの間にか冊数が増え、今年1月に出した『東京「地理・地名・地図」の謎』（じっぴコンパクト新書）が6冊目、さらに3月には続編として7冊目に当たる『大阪「地理・地名・地図」の謎』（じっぴコンパクト新書）を出す予定です。

ALSの難病と闘いながらこれだけの本を出すことは並みのことではないかもしれませんが。時には驚異の目で見られることもあります。でも私に言わせれば「他にやること・できることがなかった」からに他なりません。これまで数年間1日も欠かさず、原稿のことだけを考えて生きてきました。今日は何を書こう、どう書こうと思いを巡らしている時間は私にとっては至福の時でした。

確かに難病と闘う日々は苦しく辛い。でも、手足は動かすこともできず発声もできなくとも、心・精神は自由でした。

(6) 広がった交流

ALSを宣告されて一番恐怖だったのは、社会的に孤立することでした。これまで交流のあった知人・友人・教え子たちとの交信も途絶え、一人寂しく死を迎えるのかと思うと涙がこぼれました。

しかし、それが全くの杞憂に過ぎなかったことに気づくのに、それほど時間はかかりませんでした。これは大きな嬉しい誤算でした。発信する度にリアクションが拡大していきました。その大半が私の生き方に感銘した、勇気をもたらったという類いのものでした。正直戸惑いました。ALSを発症するまでの72年間一生懸命生きてきた自負はありましたが、自分の生き方が人様に影響を与えるなどとは夢にも考えたことがなかったからです。

確かにこれまで、世のため人のためにたくさんの著作を世に問うてきましたが、直接的には学者として作家として少しでも大きな成果を残したいという思いでやってきたものです。

しかし、ALS宣告以降の著作は明らかに違う意図で書くようになりました。ALSという難病にめげず執筆を続けることが、周りの人々に生きる勇気と元気を与えているかもしれないと考えるようになったからです。そのことに気づかせてくれたのは、何と見ず知らずの小中学生たちでした。

(7) 「絶望さえしなければ 夢はつながる！」

『日本列島 地名の謎を解く』（東京書籍、2021年）に大分県にある「姫島（ひめしま）」の由来について書いたことがきっかけで、大分市立判田小学校の6年生との命の交流が生まれました。この交流を生んでくれた石井真澄先生は学年集会を開いて、ALSに負けずに本を執筆している私のことを紹介したそうです。そしてその感想文が届きました。これが判田小学校の6年生たちとの命の交流の始まりでした。

学年集会の後、石井学級では道徳の授業で中国から日本に渡って唐招提寺を開基した鑑真和上について学んだそうです。鑑真は日本からの依頼で幾度も渡日を試みるも嵐に遭って果たせなかったのですが、諦めずついに6度目の挑戦で無事に日本にたどり着いたという偉人です。すると子どもたちの中から「谷川先生と同じだ」という声が次々に挙がったとのこと。まさかまさか、あの鑑真と重ねて見られるとは夢にも思いませんでした。

私が判田小の6年生に送ったメッセージは、「絶望さえしなければ 夢はつながる！」でした。このメッセージはその直後に出した『夢はつながる できることは必ずある!!—ALSに勝つ!』（東京書籍、2022年）にそのままつながっていきました。同書には交流の一部始終を書きましたが、子どもたちの率直な優しい心に感動して、パソコンを打ちながら涙を抑えることができませんでした。

次に紹介する文章は吉田苺花（まいか）さんの「卒業論文」の一部です。吉田さんは卒論で地元の熊野神社のポスター作りに取り組んだのですが、うまくいかずくじけそうになったそうです。でもその時私のメッセージを思い起こして奮起しポスターを完成させたそうです。そして次のように書いています。

私はこの経験の中で、楽しさや苦しさがあつた。けどこの「苦しさ」は、きっと試練な気がした。私の所へ来た試練は、私を変えてくれる。私を試してくれている。そう思った。だからこそ、どんなに苦しいときでもがんばれたと思ったし、もちろん谷川先生の、「絶望さえしなければ夢はかなう！」という言葉のおかげでもあると思う。次は、谷川先生や、いろんな人に助けてもらうのではなく私が助ける側になって「試練はいいこと、その試練をチャンスに変えていこう」と言いたい。そうしたら世界中のみんなが、なんでもピンチをチャンスに変えて光の心を手に入れられると思う。私にまた試練が来たら、さらなる成長をとげると、ピンチをチャンスに変えのりこえていけると私は私を信じている。そう、いつまでもいつまでも思っていたい。

この卒論を読んで私の心は感動で打ち震えました。6年生ともなるとここまで深く考え書けるものなのか、と。この卒論を世界中の人々に読んでほしいと思いました。特に「そうしたら世界中のみんなが、なんでもピンチをチャンスに変えて光の心を手に入れられると思う」

というくだりには涙が止まりませんでした。「光の心」という言葉も素晴らしい！ 言われなきウクライナ侵攻を続けるプーチン大統領に突きつけたいと思いました。

(8) 「とにかく生きろ！ 死んではダメだ！」

縁あって甲府市にある山梨英和中学校の2年生たちから『夢はつながる できることは必ずある！—ALSに勝つ！』（東京書籍、2022年）についての読后感想が届きました。その大半が同書のある箇所に関連したものでした。私は同書で「悩むということ」という拙い詩を載せたのですが、その詩に感想は集中しました。

詩の中で私は母が口癖のように言っていた「時期が来てなるものは時期が来たら治る」という言葉を引きながら、大半の悩みは「通り過ぎていく」こと、だから堪えることが必要で、堪えることによって強い人間になれると訴えたのでした。ここに関心が集中したということは彼女たち（女子の中高一貫校です）がそれぞれ悩みを抱えながら、思春期を送っていることを意味しています。とりあえず、そのいくつかを紹介しましょう。

○谷川先生の本にある『「なぜ自分だけが……」と考えてしまうこともあるでしょう」というところが、私にも沢山ありました。しかし、「時期が来てなるものは時期が来たら治る」というのを聞いて、すぐに悩みがなくなるわけではないけど、堪えていけば通り過ぎて行って、強い人間になれることが分かったので、強い人間になるために、堪え続けます。

○思春期の私にとって「とにかく生きろ!! 死んではだめだ！」という言葉がすごく印象的で、死んだらすべてが終わってしまうから今を一生けんめい生きようと思います。どんなにつらいことがあっても「死ぬ」という選択をなくして「生きる」を頭に入れながら生活したいです。

○頑張ってください。私も頑張ります。辛くてもいつか「こんなこともあったな」って思える日、明るく笑って話せる時が来ると信じて耐えます。先の見えない暗闇の中に置かれてもかすかな希望を自ら探し出せる人になりたいと、『夢はつながる』を読んで感じました。この本に出会えて本当に良かったです。

○谷川先生は死の恐怖といつも隣り合わせにいて私以上につらい経験をしていると思います。ですが、お互い頑張って生きていきましょう!!



(9) 人間は人間を幸福にできる！ きっと

小中学生との交流によって、ようやく今の自分の生き方が周りの人々に生きる勇気と元気

を届けることになっているかなと思えるようになりました。私はもともと教育学者ですので若い世代の人たちが健康で明るくそれぞれの人生を切り開いていってくれることを何よりも願っています。ことに若くして難病や障害と向き合って苦戦している皆さんには頑張ってもらいたい。難病と闘い重度障害を抱えながらも本を執筆してきた私の生き方から生きる勇気と元気をもらったという人がこの世に一人でも二人でも存在しているとしたら、喜んで残された命をその方々のために捧げましょう。

難病や障害だけではありません。2024年1月1日に合わせたかのように能登半島地震が発生しました。千葉市に住んでいる私のベッドの前にセットしてあるパソコンも小刻みに震えました。極寒の中瓦礫の下で命を落とした方々の胸中をおもんばかると、いたたまれなくなり言葉を失います。昨年出した『全国水害地名をゆく』（インターナショナル新書）は繰り返し襲う水害・津波に負けず生きてほしいというメッセージを込めた書でした。

海外に目を向ければ、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルとハマスの戦争などによって多くの人々の命が奪われ、罪のない市民が苦境に追い込まれています。

これらのさまざまな人生苦と闘いながら生きようとしている人々と同じ地平に立って「光の心」を求めたい。今はそれが自分のミッションだと考えています。

自然災害は被害を最小限に抑えるしかありませんが、病気は医学の進歩によって治すことが可能です。障害は世の人々の意識を高めれば乗り越えられます。そして戦争こそ人の力で食い止めることができます。

「人間は人間を幸福にできる！きっと」

そう信じたいと思います。東日本大震災の時「がんばろう！東北」と言われました。それになぞらえて私は心から叫びたい。

「がんばろう！人類」

こんな境地にまで導いてくれたのはALSなので、感謝すべきはALSかな？
一人間万事塞翁が馬。

2024年1月27日

谷川彰英

この私の「生きる！」宣言は、今年の1月、エンジン01（ゼロワン）文化戦略会議という文化人の団体（私はその会員の一人です）が千葉県市原市で開催したオープンカレッジ、エンジン01in市原で行われた講座「ALS それでも人はなぜ生きる!？」で提案したものです。



(2)「強き『力』に生きるかな」

「人間万事塞翁が馬」とは「人生は良いことも悪いことも先行きは不明で、終わってみなければわからない」といった意味ですが、まさにその通りです。ALSという難病に罹患したことは限りなく不幸なことです。ALSに罹患したがゆえに成し遂げられたこともあるのです。

それを象徴するのは刊行した著作の数です。本日の母校訪問に間に合わせるために突貫工事で書き上げた『ALS 苦しみの壁を超えてー利他の心で生かされ生かす』は、ALS宣告後に出した著作としては9冊目になります。わずか半年で仕上げたのですが、その間3冊の地名本を監修として出しました。

皮肉な現象ですが、こんな離れ業が可能になったのは、実はALSのお陰でした。健康体だったとしたら、旅行に行ったり馴染みの店に飲みに行ったりで、とてもこれほど執筆に集中することはできませんでした。

しかし、執筆の現場は壮絶な戦場さながらでした。私は年2回の定期検査入院が義務付けられており、今夏は8月29日から2週間入院の予定を組みました。なぜこの時期に設定したかという点、『ALS 苦しみの壁を超えてー利他の心で生かされ生かす』を本日の講演に間に合わせるためには8月29日までに著者校正を完了させる必要があったからです。

私は障害者の意思疎通のために開発された伝の心(でんのしん)という特殊なパソコンで原稿を打っているのですが、このパソコンで文字を打つには通常のパソコンの数十倍の手間暇がかかるのです。それに手足が動かず発声もできない身であることを考えると、今年に入ってこの9月までに単著1冊、監修本3冊とは我ながら驚く数字ですが、それだけ肉体への負担が増していたことは確かでした。

比較的楽にスルーできると踏んでいた『ALS 苦しみの壁を超えてー利他の心で生か

され生かす』の校正も熾烈を極め、入院当日の朝まで続きました。

異変を感じたのは入院当日の夜のことでした。パソコンが打てないのです。クリックできないのですから、カーソルは動かない、動かない、動かない。動き出したら、止まらない、止まらない、止まらない——状態でした。

最初はパソコンの不具合かとも考えたのですが、しばらくしてそれは右腕の筋肉疲労によるものだということがわかってきました。しかし、メールでたったの十数文字を打つのに1時間以上かかった時は、「もうダメだ」と観念しました。パソコンが打てなくなったら全てが終わると。

深志高校での講演のキャンセルも頭をよぎりました。しかし、それだけは絶対に避けなければならない。そこで命がけで講演原稿を書き上げることを決意しました。私は心の中で「自治を生命の若人は/強き『力』に生くるかな」を歌い続けました。それは「臥薪嘗胆幾星霜」の精神でもありました。

もしこの草稿が後輩の皆さんの前で披露されたとしたら、どうぞ拍手をください。私にではなく、この奇跡を起こしてくれた「深志魂」にです。——ありがとうございます。

(3)生涯を懸けた教育への問い

私が教育学徒として生きることを志したのは高2（1962年）の秋のことですから、もう60年以上も前のことになります。きっかけは当時の高校教育への疑問と不満でした。自分のやりたくもない勉強をなぜ押しつけられるのか、という怒りに満ちた思いでした。本来の教育はこんなものではないはずだ、教育というのは生徒のやりたいことを支援するものではないのかという思いが頭の中で渦巻いていました。加えて大学受験の重圧でやるせない思いにさいなまれた日々が続きました。そこで「よし、それなら俺が日本の教育を変えてやる」と決意しました。強い意志に基づく志でした。

私が博士論文の対象にした柳田国男先生は、生涯の学問活動を支えたものは「何故に農民は貧なりや」という問いだったと言っています。柳田先生の問いになぞらえて言えば、私の問いは「やりたくもないことをなぜ学ばされるのか」ということになります。柳田先生は少年期を過ごした利根川べりの布川（現 茨城県利根町布川）で当時の農民の惨状を目の当たりにしてこの問いを抱き、農政学、郷土研究、民間伝承などの探究を経て日本民俗学を樹立されました。先生に共感したのは、学問は世のため人のために行われなければならないと、常に警鐘を鳴らし続けられてきたことです。その精神は私の教育学研究や地名研究にも一貫しています。

私は筑波大学の前身の東京教育大学の教育学部教育学科に進学しましたが、そこで2人の素晴らしい恩師に巡り合うことができました。これは天に感謝するしかありません。

お1人は、学部1年次に「教育原理」のゼミでお世話になった梅根悟（1903～1980）先生でした。詳しく語れないのは残念ですが、とにかくすごい先生で入学早々の私たちは目の覚めるような感化を受けました。先生は戦後の「新教育」を牽引された第一人者で、専門は外国教育史でしたが、その豊富な叡智をもとにカリキュラム改造運動も推進され、その教育学者としての業績・活動は他の追随を許さないものがありました。

先生はゼミでお世話になった翌年（1965年）、退職と同時に和光大学の初代学長として迎えられましたので、接点はわずか1年にとどまりましたが、私の教育学者としての生き方を決定づけるほどの感化を受けました。冒頭で述べた私の「生きる！」宣言にも先生の教育思想が根本的なモチーフとして流れています。宣言のタイトル「人間は人間を幸福にできる！きっと」は、世界史上最初の世界教育史の著作として知られる梅根先生のご著書『世界教育史—人間は人間を幸福にできる、その考え方の歴史』（光文社、1950年）からヒントを得たものですが、この本を読んでから60年間「教育は人間を幸福にするものでなくてはならない」と固く信じて、学問活動を続けてきました。

もうお1人は上田薫（1920～2019）先生です。先生は哲学者西田幾多郎の初孫として生まれ京都大学の哲学科に進んだのですが、学徒出陣で戦地に赴くこととなります。復員後は文部省に入って戦後新設された「社会科」の学習指導要領を完成させました。

私は大学院で直接指導を受けましたので、上田門下の1人です。後に社会科教育の研究者の道をたどるようになったのは、上田先生に師事したことによるものでした。

当時の教育論壇では「問題解決学習か系統学習か」が議論的になっていました。簡単に言うと、子どもが主体的に問題解決を図りながら学習するのを重視する立場と、いやそうでなく教えるべき内容を系統的に教授することこそ重要だとする立場の間での論争でした。

私は梅根先生からこの世に「問題解決学習」という考え（理論）が存在することを教えられ、これこそ高校時代に抱いた「やりたくもないことをなぜ学ばせられるのか」という問いに答えてくれるものだと考えていましたので、当然のことながら問題解決学習派に与（くみ）していました。

(4)信州の学問と教育の風土

その流れの中で、生涯の師として上田先生の門を叩いたこととなります。子どもの現実から出発し、子どもの興味・関心に沿った学習の実現を図ることが、私の使命だと考えるようになりました。

上田先生は信濃教育会という全国でも類を見ない教育会の研究所長を長く務められ、長野県の教育界をリードしてきた先生です。若い頃は上田先生の後を継ぐのは私だと見られてい

ましたが、信州で生まれ育った私にはある一点で「違うな」と思えることがあり、恩師とは別の道を歩むこととなります。

その一点というのは信州人の学問に対する知的風土です。高校から大学の頃父の代わりに檀家周りをしていたのですが、よく博学なおじさんから小難しい話を聞かされました。もともと松本市一帯は全国的に見ても幕末に最も多くの寺子屋があったと言われていたことからわかるように、学問と教育に関する意識が高い地域です。開智学校や山辺学校などはその象徴と言えます。

信州における学校の教員の社会的評価は極めて高く、戦前には村人から「先生様」と呼ばれていたとのこと。昔から信州の教員の間には単なる teacher ではなく、何らかの専門的な研究分野を持つことが望ましいといった知的風土がありました。私がまだ皆さんの頃の話です。我が生家の徳運寺に毎年一泊で開智小学校の先生方が研修に来ていました。小学校の先生の研修なのでつきり教育に関する研修かなと思ったのですが、あにはからんや純粋な万葉集の研修でした。

関連してもう一つエピソードを紹介しましょう。アララギ派の歌人島木赤彦が小学校の教員をしていた時の話です。確か 4 年生の担任でした。授業時間になっても先生雅来ないので、宿直室の様子を見に行ったそうです。すると先生は無我夢中で歌作りに専念している。その姿を見て感動した子どもたちは、「先生もあれだけ頑張っているんだから、自分たちも頑張らなくは」と考え、教室に戻って自習を続けたそうです。

このような信州の風土が柳田国男先生の学問観・教育観に共感を与えたのだと思います。柳田国男先生は松本銀行の行員だった胡桃沢堪内（くるみざわ かんない）の招きで、何度も松本地方を訪れています。特に東筑摩郡洗馬村（現塩尻市）の長興寺で行った講演は後に『民間伝承論』（1934 年）としてまとめられ、ここに日本民俗学の原型ができ上がったのでした。



(5)地名から歴史を探る

柳田国男先生の話になったので少し脱線します。柳田国男は明治 8 年、兵庫県に松岡国男として生まれました。柳田姓に変わったのは旧飯田藩士の柳田家に養子入りしたからです。

たから、半分は信州人だと言っていいのです。ちなみに「柳田」は「やなぎた」と読み、先生は「やなぎだ」と呼ばれることを嫌ったそうです。それと同じことを私も経験してきましたので他人事ではありません。入山辺小学校・山辺中学校時代は「たにかわ」でしたが、深志時代には「たにがわ」と呼ばれることが多くなりました。人名も地名もそれぞれ歴史的風土の中で育まれてきたものですから、読み方一つでも大切にしたいものです。

これから松本市の地名の話に飛びます。昔中心街に「飯田町（まち）」という通りがありました。これは飯田から来た商人たちが開発した所です。松本には城下町特有の由緒ある町名がたくさんありました。

その筆頭は何と言っても「大名町」でしょう。大名はお城に1人しかいないのにそれにかこつけて大名町と名乗ってしまうあたりが松本人の凄いところですよ（笑）。今さびれているようですが、「六九（ろっく）商店街」と言えば、井上デパートを擁する松本を代表する商店街でした。この「六九」という不可思議な地名の由来は、この地に6間×9間四方の厩が置かれていたことによるものだそうです。

塩尻方面から松本を經由して善光寺に抜ける街道筋（北国西街道、別称善光寺街道）をたどってみます。本町の角をまっすぐにお城方面に向かうと女鳥羽川に出ます。その一つ手前の通りを右に入ります。中町通りで、これが昔の街道筋です。今は再開発されて道幅も広がっていますか、昔は文字と通りの狭い中町でした。

中町を直進すると道路にぶつかりますが、そこを左折して東町方面に街道つながっていきます。「東町」は文字通り城下の東に位置するところから命名されたものですか、その裏の町を「裏町」と名付けたのは納得できますね。

松本にはもう一つ忘れてはならない町名がありました。松本駅前の通りは国府町（こくぶちょう）と呼ばれていました。昔この地に信濃国の国府が置かれていたことにちなむもので、まさに松本の玄関口にふさわしい町名でした。

ところが、昭和37年に制定された「住居表示に関する法律」を適用することによって、松本の由緒ある町名はことごとく地図上から姿を消していきました。この法律は住居表示の合理化の名目の元、例えば「中央三丁目5番1号」のように整理しようとするものでした。松本市では全国に先駆けて(?)この法律を適用し、大名町は大手〇丁目、国府町は中央〇丁目といった具合に何の意味もない町名に変えられてしまいました。文化都市松本市としては残念と言うしかない失政でした。その証拠に、現地にはここはかつての大名町、国府町であったという趣旨の看板が立てられています。

蛇足ですが、この施策は同じ16期の某君のお父さんが市長の時履行されたと聞きました。色んなところで人はつながっているものです。

(6)「世の先駆けの名に恥じず」

(1)私の教育改革

話を戻します。高校時代に教育学徒を志して教育学者となったことはわかったけど、そもそもお前は日本の教育改革のために何をしたんだという問いに答えなければなりませんね。結論から申し上げますと、平成元年に改訂された学習指導要領で小学校低学年に新設された「生活科」という教科の成立・定着・発展に深く関わり、その後に設けられた「総合的な学習の時間」の指針を作った点にあります。

生活科は低学年の社会科・理科を廃してその代りに設けられた教科で、趣旨は次のようなものでした。

「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う」

キーコンセプトは「自立への基礎を養う」ですが、これは教育というものの本質を示唆しています。子どもを育てるということはそれぞれに「独り立ち」（自立）させるものだからです。

生活科が日本の教育界に投げかけたのは、一人ひとりの子どもの「学び」に着眼することの大切さです。従来の教科では一人ひとりを生かすと言いながら、所詮は国が定めた教科目標に収斂させてしまうのが落ちでした。ところが生活科では一人ひとりの子どもが何を学ぼうとしているか、どう学ぼうとしているかに注視することから始めようと考えたのです。この発想の転換は一見小さいように思われますが、実はコペルニクス的転回と言うべきものでした。私はこの教科がやがて日本の教育を変えるに違いないとの確信のもと、全力で生活科の定着・発展に尽くしました。

そのほぼ10年後、小中学校は平成10年、高等学校は平成12年に「総合的な学習の時間」の導入が決定されました。ところが、学校現場では「どうして教えたらいいかわからない」という声が充満し、それに対応するために中央教育審議会（中教審）の中に特別部会が設けられ、その座長を私が務めたという次第です。

私の胸中には、高校以来心にためていた「やりたくもないことをなぜ学ばせられるのか」という積年の問いが去来していました。深志高校では総合でどんな取り組みがなされているかは知りませんが、深志の伝統である「自治」の精神で勉学の実効を挙げてほしいと切に願っています。

私の教え子が校長を務める某附属高校では、国からSSH（Super Science Highschool）の指定を受け「探究」学習で注目を集めています。深志でも探究学習を進めて将来ノーベル賞を受賞する人材を育ててくれるように期待しています。

(2)ALS罹患までの人生

そんなわけで、校歌に謳われている「世の先駆けの名に恥じず」の責任の一端は果たせたかなと考えています。大学の教員になりたての頃描いた将来の人生像を 100 パーセントとすると、実際の私の人生は 500 パーセントにまで膨れ上がりました。普通の大学教授で終わる姿を基礎の 100 パーセントとすると、次の 100 パーセントは柳田国男研究に始まる地名研究でした。10 年ほど前、読売新聞の丸山教育部長の進言を受けて「地名作家」を名乗るようになりましたが、高校時代漠然と作家になりたいという夢を抱いていただけに、正直嬉しいです。丸山という姓は長野県から新潟県に多く分布しているので伺ってみたところ、やはりルーツは信州ということでした。蛇足ですが（笑）。

次の 100 パーセントはマンガ界での交流です。『釣りキチ三平』の矢口高雄先生と知り合いになったことをきっかけに、『仮面ライダー』の石ノ森章太郎、『ルパン三世』のモンキー・パンチ、『あしたのジョー』のちばてつや、『アンパンマン』のやなせたかし、女性マンガ家の旗手・里中満智子先生等々のマンガ家さんたちと同じ目線でマンガ文化について語ってきました。東アジアマンガサミットにもパネラーとして何度も参加しましたし、私の書いた本がマンガ化されたこともあります。

そんな活動が認められてエンジン 01 文化戦略会議に推薦されて会員となりました。これが 4 つ目の 100 パーセントでした。これも私の人生に決定的な影響を与えてくれました。日本の文化界を代表するトップランナー 200 数十名から成るボランティア団体ですが、幹事長を務めた作曲家の三枝成彰さんや作家の林真理子さんなどの超一流の文化人から多くの感化を受けました。

ここで皆さんに是非知ってほしいのは、これくらいのレベルになるとどの大学を出たかなどは全く問題にされないということです。評価されるのはどれだけプロダクティブに文化価値を生み出しているかの一点のみです。

さて問題は次の 100 パーセントです。これまで述べたように、私の人生は多くの素晴らしい才能をお持ちの方々との出会いで満足いくものであったと思います。ただ、やはり悔いが残るのは、大学の管理職を引き受けざるを得ない状況に追い込まれたことです。もともと私はお山の大将でしたので、集団や組織のトップとして牽引する能力は確かに長けていたと思います。しかし、当時の私にとって最もやりたかったのは全国を巡って地名本を書くことでした。役職に就けば当然取材活動は制限される。さんざん悩みました。

最初に着せられた袴は大学院の教育研究科長という役職でした。教員数 170 名に及ぶ巨大な組織で、運営上のストレスで鬱状態になり、一人悴に乗って 帰松し城山を散策したのですが、心は晴れませんでした。

その後学校教育部長を経て平成 16 年、国立大学の法人化に伴って国立大学法人筑波大学の理事（附属学校教育局教育長）を拝命する羽目になってしまいました。やむを得ず引き受

けた役職でしたが、引き受けた以上手は抜かないとの思いで、次々に改革を断行しました。理事の任期は当面は3年でしたが、全理事ともさらに2年延長することが暗黙の前提になっていました。そんな中私は学長に理事を辞めたい旨を直接伝えに行きました。ところが、学長の回答はたった一言でした。

「あんた以外にできる人いる？」

この一言には負けました。客観的に見て当時の状況下では私が続投するしかないことは自分でもわかっていました。こんなこともあって、私はさらに副学長という袴を重ね着することになったのでした。

その2年後学長の任期が切れ新学長を選出することになりました。ちょうど今の自民党の総裁選や立憲民主党の代表選と同じ構図になりました。私はある強力なグループから学長選に出馬するよう、強い説得がありました。余りに強い説得だったので、一時はその気持ちになったこともありましたが、最終的には同意しませんでした。

理由は、もし学長になったら自分の人生はそれで終わると考えたからです。学長という袴は私にとっては不要であるどころか邪魔物（障碍）でしかありませんでした。学長は確かに名誉職ではありますが、所詮は一大学内部で通じる話で、しかも任期が過ぎれば忘れ去られていきます。

それよりも、全国の不特定多数の読者を対象に本を書く作家の道を選びました。何より作品には任期はありませんからね（笑）。

(3)「強い意志」と「高く深い志」

さて以上がALSに罹患するまでの人生でした。確かに「世の先駆けの名に恥じず」の一面を象徴しているようにも見えますが、ALSと闘病する過程で「この生き方で良かったのだろうか？」という疑念が浮上し、今は新境地に立っています。

とは言っても、これまでの生き方が間違っていたというわけではありません。むしろ次の2点は是非踏襲してほしいと願っています。

一つは「自分は何のために生きるか、生涯を懸けて何をしようとするか」を苦しみながら考え抜くことです。とにかく自分の頭で考え抜くことです。

二つ目は「強い意志」と「高く深い志」を持って事に臨むことです。意志が弱ければ途中で諦めてしまいます。志が低く浅ければ途中で満足してしまいます。これ以上は述べませんが、胸の内で十分反芻してみてください。

私はこれまで大学管理者やALSとの闘病のハンディをはねのけて、がむしゃらに本を書き続けてきました。その数は単著の他、編著、監修などを入れると100数十冊を優に超えるだろうと推察されます。

その著作歴の中で、ALS罹患後は明らかに違う意図で本を書くようになりました。それ

を促したのは「利他の精神（心）への覚醒」でした。

(7)利他の精神への覚醒

(1)3.11チャリティコンサート

2023年3月11日、東京のサントリーホールで行われた第10回「3・11 全音楽界による音楽会 チャリティコンサート」に参加しました。外出は2022年10月に岐阜まで遠征して以来2度目でした。このチャリティコンサートはあの東日本大震災の直後の2011年6月、三枝成彰さん、林真理子さん、湯川れい子さんなど音楽・文化関係者たちの呼び掛けで始まったのですが、今回で10回目を迎えました。

毎回我が国を代表するトップアーティストに協力いただくのですが、出演に際しては全てノーギャラ。チケット代は0円、ただし入場の際に「1万円以上」の寄付金を申し受けるという仕組みです。寄付金は東日本大震災の震災孤児の支援の資金に充てられています。ちなみに今回の来場者は1,641名、寄付金総額は1977万3928円に上ったそうです。

ユニークなのは会場の入り口にバケツを持ったボランティア数名が並んで来場者から寄付を募るという光景です。「バケツ募金隊」と呼んでいます。この年の隊員は作詞家の東海林良さん、ニュースキャスターの安藤優子さん、発起人の1人で音楽評論家の湯川れい子さん、放送作家でコラムニストの山田美保子さん、それに私でした。実際にはこれに発起人の作曲家・三枝成彰さん、作家の林真理子さんが加わって募金が行われました。



(2) トロンボーンの違い

チャリティーコンサートの案内には「ジャンルを越えた音楽のチカラを！」というコピーが掲げられていました。私には当初この「音楽のチカラ」という言葉がピンときませんでした。音楽ってどんなチカラを持つてるの？などと半信半疑な思いがあったことは事実です。それは「プロ」のチカラを知らなかったからでした。そのことをコンサートで嫌というほど知らされました。

私が音楽好きになったのは中学校の音楽の授業との出会いでした。昔も昔、大昔の話です。平賀先生という男性教師の授業が〈ただ〉好きでした。作曲の真似事をしたこともありますし、挙句の果てはブラスバンドに入りトロンボーンを担当することになりました。入部して

間もなくのことでした。市のブラスバンドの大会に出場することになり、私も壇上に上がることになりましたが、その時先生に言われたのが次の一言一。

「谷川、トロンボーンを動かしてもいいが、音は出さなくていい」

まだトロンボーンに慣れていない私をおもんばかっていた言葉でした。今にして思えば良き時代でした。かくして私は一回も音を出すことなく演奏は終わったのでした。）

(3)「音楽のチカラ」

そんな音楽経験しかない私にとってこのコンサートは大きな衝撃でした。クラシックからカンツォーネ、オペラなどの声楽、ピアノ・バイオリン・アコーディオンの演奏、さらに合唱団による歌唱、そして取りは坂本冬美さんと五木ひろしさんの熱唱でした。

3時間に及んで次々に繰り広げられるアーティストたちのパフォーマンスに私は「圧倒」されっぱなしでした。それは単なる「感動」などといったレベルを超えて、全身に音楽の波が怒濤のように覆いかぶさってくる感覚でした。そうか、これが「音楽のチカラ」なのか！

どうしたらあんな声量が出せるのだろう。ピアノやバイオリンやアコーディオンの演奏はどうだ！ どうしたら神業のようなあんな演奏ができるのだろう。少年時代、一度もトロンボーンの出すこともなく壇上を去った私にはまさに衝撃以外の何物でもありませんでした。

その歌唱や演奏に合わせるオーケストラの糸乱れぬ演奏も見事！ そして私はそれを操る指揮者の身のこなしに密かに注目していました。メインの指揮者の大友直人さんはエンジン01文化戦略会議の会員でよく知った仲でしたが、ここまでの指揮の現場を見るのは初めてでした。大友さんのしなやかな手の動きを見ていると、全身から無理なく自然に「音楽のチカラ」が伝わってくるのがよくわかりました。

(4) 打ちのめされたプライド

私は大学教員でしたので人前で話すことはプロのうちでしたし、それなりのプライドもありました。学生時代はドイツで通訳をしたこともありましたが、アメリカではUCLAなどで日本のマンガ・アニメや地名について講演したこともあります。筑波大学でも江崎玲於奈（えさき れおな）学長の発案で行った学生投票で人間学類（学部）のフレンドリーティーチャーに選ばれたこともあります。

要するに人前で話すことにはいささかの自信と自負があったのですが、そんなものはコンサートを聴いて一気に吹き飛んでしまいました。アーティストの演奏から発せられるほとぼしるようなエネルギーとパワーに比べれば、私の行ってきた講演など足元にも及ばない。まるで異次元の世界を見せつけられた思いでした。この違いはどこから生まれるのか。

(5)「利他の精神に溢れたコンサート」

サントリーホール1階隅の車椅子席でコンサートを聴きながら、私はその問いに答える言葉を探していましたが、でも見つかりませんでした。

コンサートが終わった翌日、同行した知人の藤波亜由子さんからメールが入りました。そこにはこう書かれていました。

「利他の精神に溢れた素晴らしいコンサートでした」

素晴らしい表現力！ 「利他の精神」という言葉で私の問いの答えが見えてきました。無言のままバケツの中に1万円札を入れてくれた来場者の顔を思い浮かべました。今思い起こすとバケツ募金隊に寄ってくださった皆さんの表情にはある共通点があったことに気づきました。それを言葉で表現することは難しいのですが、「震災から一日も早く立ち直って元気を取り戻してほしい」という思い・祈りとも言うべきものでした。言い換えれば「利他の精神」です。

「利他」とは他人（ひと）のために力を尽くすことです。来場者の表情には例外なくこの「利他の精神（思い・心）」がにじんでいました。この利他の思いはアーティストを含めた千数百人のコンサート関係者・参加者に共有されていたはずですが、こう考えてきて私の問いはようやく解けました。

あのチャリティコンサートでは、舞台上で演ずるアーティストと私たち聴衆の間には「壁」がなかったのです。さらに聴衆一人ひとりの間にも「壁」はありませんでした。だから舞台からの音楽がストレートに「チカラ」となって私たちの魂を揺り動かしたのでしょうか。その時サントリーホールは確かに「利他ホール」に変身したのです。

私ども大学人がやっている講演との違いも見えてきました。私どもの場合は壁だらけなのです。講演の趣旨に同調しない聴衆がいるのは当たり前ですし、その他日常的に学閥や政治閥などさまざまな壁に取り囲まれてがんじがらめに縛られているのが現実なのです。

(6)苦しみの連帯

湯川れい子さんがチャリティコンサートの案内に「コロナ禍でも、いえ、コロナ禍だからこそ、生演奏と生の歌声に力を貰います」と書いていましたが、その言い方お借りすれば「ALSでも、いえ、ALSだからこそ、チャリティコンサートに参加し力を貰いました」と言えるでしょう。

私は今手足は全く動かず人工呼吸器を付けているために発声もできませんが、そのような苦しみに耐えてきたからこそ言えること、言いたいこともあります。苦しみの対象と質は異なってはいても、苦しみを乗り越えかすかな光でさえも追い求めて生きようとする姿勢は同じはずです。

当日、知人・友人・関係者の皆さんに心づくしのメッセージを送りました。

皆 様

私が言うのも変ですが、本日のチャリティコンサートにご参加いただきありがとうございます。エンジン01文化戦略会議会員の谷川彰英です。私は5年前ALS（筋萎縮性側索硬化症）を発症し、現在発声もできませんので文書でメッセージを伝えさせていただきます。

3・11から12年。ALSに倒れるまで復興支援のさまざまな活動に参加してきましたが、家族や家屋を失い故郷を追われた方々のことを考えるといたたまれなくて本コンサートに参加しました。私も苦しいですがそれ以上の苦しみと闘っている皆さんのことを考えると、「ALSごときに負けてたまるか！」という勇気が湧いてきます。

震災の記憶を風化させないために小文を書きました。演奏の合間にでもご笑覧いただければ幸いです。もともになった連載は『全国水害地名をゆく』として、関東大震災100年を迎える9月に上梓する予定です。（*時間の都合で省略）

最後に本コンサートの歌声が3・11の被災者の皆さんのみならず、戦禍で苦しむウクライナの人々、未曾有の大地震の中で必死に生きようとしているトルコ・シリアの人々にも届くことを祈っています。

2023年3月11日

谷川彰英 地名作家・筑波大学名誉教授

今私は支援を受ける立場にあります。医師・看護師をはじめ十数名のヘルパーさんたち、さらにリハビリの専門家など数十名の関係者の皆さんによって私の命は支えられています。でも支えられて生きていだけでいいとは思いません。どんな苦境に立たされてもできることは必ずある！ そう私は信じています。

(7) 袴を脱いで――幸福空間を届ける

『ALS 苦しみの壁を超えて――利他の心で生かされ生かす』の「はじめに」で次のように書きました。

「自分は幸福空間に生きている！」と考えるようになりました。以前は「不思議な幸福空間に包まれている」と感じていたのですが、本書を書き上げる中でそれは確信に変わりました。

2019年5月にALS（筋萎縮性側索硬化症）の宣告を受けてから、手足は全く動かず発声もできない状態が続いているのに、なぜか幸福空間に生きていると感じるのです。それは、不治の難病と言えども、人間の精神の自由を奪うことはできないと考えるからです。

生死の境をさまよう絶望の底から「生きる！」を選択し、本の執筆を続けてきました。A

LS 宣告後出した本は、本書で9冊目になりますが、これはどんな苦境にあっても諦めず強い意志を持って生きようとすれば道は開けることを示唆しています。

ALS を発症したのは72 歳、宣告されたのは73 歳の時でした。その時はこのまま人生を終えても悔いはないと覚悟を決めました。医師からはよくて3、4年の命だと言われたからです。ところが私はまだ生きています！ この最後のステージを用意していただいたことに感謝しています。

私はこのステージで多くのことを学びました。それまでの人生観・価値観をひっくり返すような体験をしました。それは一言で言えば、人間の優しさ・強さ・素晴らしさの覚かく醒せいでした。そして、それは人と人がつながることの大切さに気づかせてくれました。

人とつながる素晴らしさを教えてくれたのは、何と見ず知らずの大分市の小学校6年生たちでした。純粋でストレートな優しさに溢れた手紙を読んで、感動の涙を抑えるために何度天を仰いだかわかりません。その後子どもたちとの交流は甲府市の山梨英和中学校の生徒たちにも広がって現在に至っています(中学生との交流については本書第2章で詳しく述べました)。

ALS に罹患することによって心の交流のできる仲間の輪が広がると同時に、以前からお付き合いいただいていた人との交流もぐんと深まりました。本書の帯に推薦文を書いていただいた林真理子先生もそのお一人です。

「辛いご病気と戦う中で、さらに知性と洞察力をとぎすまれているのだとつくづく思います。谷川さんとめぐり合う子どもたちが、みな感動を得て、成長していくさまは素晴らしい」

涙にむせびました。考えてみれば、私の人生は幾重にも重なった袴を着せられた侍であったように思います。大学教授・副学長・学会会長・研究所理事長などの肩書きは皆袴です。そんな袴を脱ぎ捨てることによって、初めて「そのままの人間」が見えたのでした。

多くを語る必要はなかろうと思います。66年前入山辺小学校を卒業したのですが、卒業式でPTAの会長さんが述べた次の一言を片時も忘れたことはありません。

「偉い人にならなくてもいいから、立派な人になってください」

それにならって言えばこうなります。

「偉い人になってもいいけど、人に幸福空間を届けられる人になってください」

最後にお招きいただいたお礼に、この1年余りに出した本を寄贈させていただきます。

先ず本講演のバックになっている『ALS 苦しみの壁を超えてー利他の心で生かされ生かす』（明石書店）を5冊。是非お読みください。きっと元気が出ることと思います。その他、次の地名本5冊、それぞれ2冊ずつ寄贈いたします。東京、京都、大阪の大学へ進学希望の方にお奨めです。

